

令和4年度熊野古道協働会議・第2回分科会（R4.9.13）

意見交換 発言要旨

*事務局において、意見交換での発言要旨を内容ごとにまとめました。

【総論】

- 持続可能な保全体制にしていくために、担い手、資金、組織の3つを、仕組みとしてスタンダード化していく必要がある。その中でスタンダード化されているのが、東紀州地域振興公社の補助金だと思う。そのほかにも、市町独自の補助金やパトロール事業があり、伊勢路全体としてどのように配分、標準化していくのかが必要になってくる。

【熊野古道サポーターズクラブ】

- サポーターズクラブの現状について、会員数は約1,700人、1回あたり10人程度で、年間40～50人が活動に参加している。活動目的は、保全活動だけでなく、歩いて広報してもらうという目的もある。
- サポーターズクラブに参加してくれた方へのインセンティブがあるといい。参加回数に応じたインセンティブなどを検討してほしい。
- 一斉保全活動で団体間の連携ができる体制があれば、より団体間の交流が深まるのではないかな。
- サポーターズクラブを受け入れる際などさまざまな場面において仕切ることのできる世話人を養成するべきだと思う。

【伊勢路全体の保全を統括する組織・目指す保全のレベル】

- 伊勢路で目指す保全のレベルをどこに設定するかを考え、それにより投入する資金、担い手をどれだけ確保するのか、統括する組織はどうあるべきか議論する必要がある。
- 統括する組織は民間とし、各峠に配分するリソースを考えるべきではないかな。

- 保全活動の望ましいスタンダードについて、文化財の視点から、国史跡として最低限必要なレベルは、峠の文化財区間を歩いて踏破できることで、県と市町が取り組むべきこと。保全推進協議会で修繕が必要な箇所を把握し、国と県の補助金で修繕できる。保全団体には、いかに快適に歩けるか、という部分を担っていただいていると思う。
- 教育委員会の所管は世界遺産区間のみで、伊勢路全域の視点から、登録されていないエリアの保全をどう担保するのか、ということについても議論が必要。
- 新組織に期待したい。新組織で保全団体の担い手の募集情報を広報誌に掲載するなどの協力ができるのではないか。
- 団体の会員が1人という団体もあり、担い手・後継者不足は深刻な状況。保全を森林組合やシルバー人材センターに頼むという手法も考えられるが、保全団体は熊野古道のことをよく理解している人たちであり、できる限りの存続を図っていくべきだと思う。

【資金・担い手確保】

- 資料に基づき情報の共有がされました。
- 東紀州地域振興公社の補助金で車の燃料代を支出できるよう、要望の声がありました。

【まとめ】

- 本日明らかになった、峠によって補助金に濃淡があるという状況を、各市町におかれては持ち帰ったうえでしっかりと認識をしていただきたい。